第2章　平成20年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室において年に3回程度の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成20年度は、展示・公開活動として、企画展を3度開催した。また当館初の試みであるが、学内の他の学術分野との連携企画展として本学教育学部美術教育教室有志との共催で美術展を開催し、更に地域の考古学研究団体の巡回展示に共催し、会場提供を行った。資料館展示室以外での展示・イベント活動としては、総合図書館1階ロビーにて資料展示を、本学の寮祭である七夕祭、医学部大学祭、工学部大学祭において出張展示を実施した。

社会教育活動に関しては、農学部附属農場との共催により第7回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう3－』を開催した。また、山口市立平川中学校・山口大学教育学部附属山口中学校の総合教育の一環として、それぞれ2名の職場体験学習を受け入れた。この他、地域NPO法人との連携で前年度に実施した『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』の成果展を山口県庁ロビーにて開催した。

当年度は、後半期に発掘調査業務が増加し、休館期間が長期化したため、昨年度に比して資料館展示室の入館者数が激減した(表17・18)。しかしその一方で新たな活動への取り組みを開始しており、次年度以降の活動への布石となる1年であった。以降、その活動内容の詳細を報告する。

表17　埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1157	1228	776

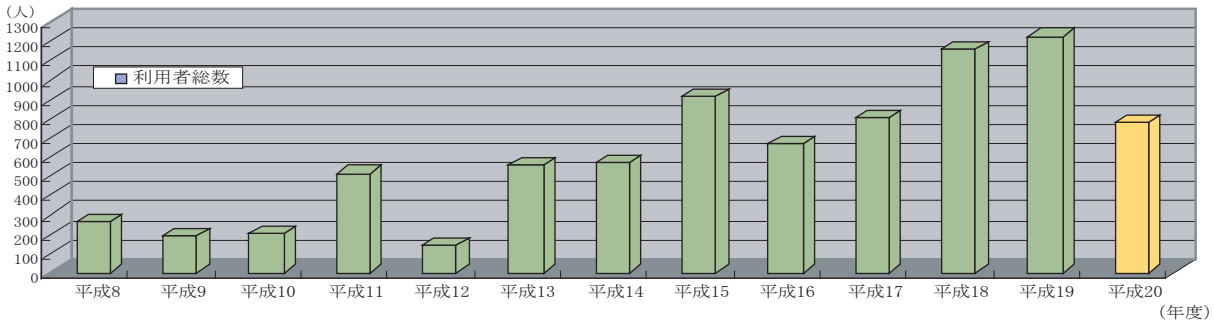
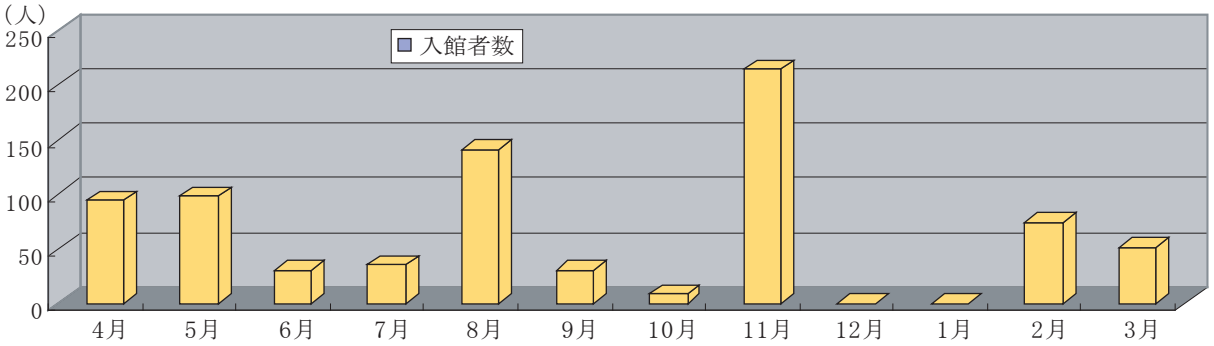


表18　平成20年度月別入館者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入館者数	94	98	30	35	141	30	8	215	休館	休館	74	51



第1節　資料館における展示公開活動

第25回企画展『ロマン発見～考古学者の鍬～』を開催

埋蔵文化財資料館には、当館が実施した構内遺跡での発掘調査出土品の他、本学統合移転時の山口大学吉田遺跡調査団により調査された吉田遺跡出土品、そして主として本学名誉教授小野忠熙氏が発掘調査を担当した県内主要遺跡の出土品が収蔵されている。当館はこれらの実物資料を活用し、様々なテーマで企画展示を開催しているが、展示室で実施しているアンケート調査では、以前より「なぜ土の中に遺跡があると分かるのか」「バラバラの土器をどのようにくっつけるのか」「遺跡の発掘に参加してみたい」など、遺跡の発掘調査方法に対する疑問や、発掘体験を希望する声が数多く寄せられていた。

そこで平成20年度は、「遺跡とはどのような土地を指すのか」「発掘調査の目的とは」「発掘調査の技術と道具」「調査成果の活用方法」を学ぶ企画展を開催することとした。展示は2部構成とし、遺跡地での発掘調査（外業調査）を対象として第1部『ロマン発見～考古学者の鍬～』を、室内での整理作業から調査報告書の刊行（内業調査）、調査成果の活用までを対象に第2部『ロマン発見～考古学者の筆～』を開催することとなった。

第1部は平成20年4月1日から6月20日の期間で開催した。展示では、まずは本学吉田キャンパスが所在し、遺跡の密集地域でもある山口市平川地区の遺跡分布図を提示し、私たちの日常生活と埋蔵文化財保護活動の関係について説明を行った。その後に遺跡が地下に埋もれる要因の解説し、私たちが実際に使用する掘削道具や測量機器の実物を展示した。

35㎡という限られた展示空間で立体物である遺跡の解説、そして発掘調査という行為を表現することはなかなかに困難で、考古資料の展示以上に難解な用語が解説パネルに踊ることとなったが、観覧者からは「地道な作業を繰り返すとても根気のいる仕事であることがわかった」「宝探しではなく大切なのは「正確な記録」であることを知った」「これから4年間、資料館に通うことで子どもたちに日本史を楽しく教えられる先生になりたい」などの感想が聞かれおおむね好評であったが、「ホームセンターで買うことができそうな道具ばかりでがっかりした」「体一つでできそうな仕事と思っていましたが、発掘調査には意外とお金がかかるんですね」など、意外な視点からの感想も多数寄せられた。実際の発掘調査体験とまではいかないが、多くの方々に遺跡地での発掘調査のイメージをつかんでいただけたものと思っている。

写真 259　第 25 回企画展ポスター

写真 260　企画展の模様

第26回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』を開催

第2部とした室内での整理作業（内業調査）から発掘調査報告書の刊行、出土資料の保管・活用は第1部以上に地道（地味）で動きの少ない行為であるため、展示における様々な工夫を必要とした。

まず、出土品の洗浄から接合、復元までは繊細な手の作業であるため、当館事務補佐員乃美友香の尽力により多量の「手」の石膏模型を製作し、各作業における手の動きを再現した（写真262）。また、体験型学習コーナーには遺物の接合体験として厚紙製遺物パズルと復元土器を砕いたパズルを用意したが、土器パズルは「復元品」であることがうまく伝わらなかったのか見学者が挑戦する姿をあまり見かけなかったことを記憶している。

遺物の実測作業の説明には使用する様々な道具を展示し、マネキンを用いて実測作業風景を再現した。これらの作業復元展示には見学者も非常に興味を抱いていたようであり、「これまでの展示で一番面白かった」「この館は様々な工夫をしていて感心した」など嬉しい声が寄せられたが、一方で最終的な成果物である発掘調査報告書に関しては、「ご自由にお読みください」という声かけにもかかわらず、実際に手に取る方は極めて少なく、あらためて発掘調査報告書と資料の展示公開事業の存在意義を考えさせられる結果となった。

第2部の会期は7月14日から10月10日、第1部とあわせると6ヶ月をかけての開催であったが、総入館者は402名と近年の企画展としては低調であった。企画展示を2部構成としたのはスペースが狭小であることが大きな理由であるが、2部構成にすることでできるだけ多くの学生・教職員・学外者にリピーターとなっていただきたいという気持ちも少なからず存在した。そうした意味においては今回の企画は必ずしも成功とは言えない結果となったが、当館は大学という教育研究機関の博物館施設であることから、研究における基礎資料の獲得方法を丹念に解説する機会を設けたと考えれば、この一連の企画展には重要な意義があったのではなかろうか。

ただし、当館としては異例の「実物資料を用いない展示」であったため、企画展内容を知らずに見学に訪れた方を失望させた一面もある。毎年の恒例展示とする予定はないが、学生が入れ替わる4年をめどに、開催期間を吟味した上で再度同様の企画を実施したいと思う。

写真 261　企画展の模様①

写真 262　企画展の模様②

第27回企画展『謎の官衙～山口大学1200年の時空を超えて～』を開催

平成21年3月20日から同年5月29日まで、当館展示室において企画展『謎の官衙～山口大学1200年の時空を超えて～』を開催した。

当初は卒業・入学シーズンと重なる期間での開催となるため、吉田遺跡の概要展示を開催する予定であったが、本書所収の発掘調査概要報告に記述したごとく、年度後半から発掘調査業務が多忙となり、十分な展示準備期間が得られなかったため、急遽平成20年度七夕祭で実施した展示内容（本書254頁参照）を拡充させるかたちで企画展示を構築した。

吉田キャンパスが所在する吉田遺跡の東部から南部に広がる台地上には、奈良時代から平安時代にかけて古代官衙が存在したと推定される。展示では「なぜ官衙が存在したと言えるのか」というテーマで、その証拠となる埋蔵文化財資料を種別ごとに以下のように公開した。

【1．文字関連資料が語ること】古代における識字率を解説し、文字資料が存在する意味を説明した上で、吉田遺跡出土の墨書須恵器、木簡、円面硯などの実物展示を行った。

【2．装身具が語ること】吉田遺跡からは、古代官人が身にまとったと考えられる腰帯具および蛇尾が出土している。このコーナーでは、奈良時代の衣服令を解説するとともに、一部見島ジーコンボ古墳群出土資料も交えて実物展示を行った。

【3．官衙の用途】吉田の地に官衙が存在したという文献的な記録は何も残っていない。このコーナーでは、これまでの発掘調査により出土した銅鉱石や鞴羽口などを展示し、この地に金属の鋳造工房が存在した可能性を提示した。

【4．遺構が語る官衙の存在】吉田キャンパス南部の動物医療センター周辺では、大型掘立柱建物や総柱建物が確認されている。このコーナーでは遺構配置を図示するとともに、大型掘立柱建物に用いられた柱根を展示した。

この他、多数発見されている製塩土器（六連式製塩土器）片やその復元レプリカ、そして奈良時代前半期と後半期の土器資料の比較展示を行った。

比較的オーソドックスな展示内容であったが、開催期間中の入館者総数は413名に上った。十分な準備が行えぬまま踏み切った展示ではあったが、見学いただいた方々にお礼申し上げたい。

写真 263　第 27 回企画展ポスター

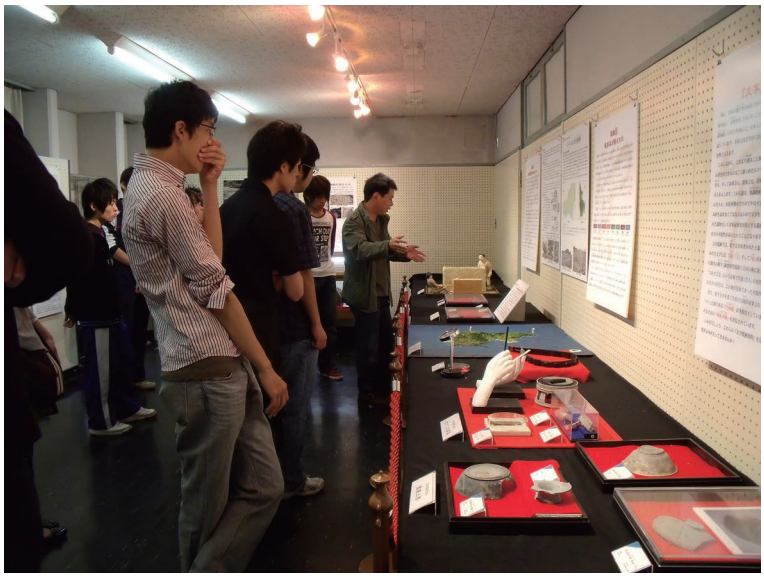


写真 264　企画展の模様

学内連携企画展『INSTALL －インストール－ A・I・A　ｱｰﾄ・ｲﾝ・ｱﾙｹｵﾛｼﾞｰ』を開催

平成21年2月2日から27日の期間、山口大学教育学部美術教育教室の学生有志による美術展を開催した。美術展示は当館初の試みであるが、学内他機関との連携展も初の試みであった。

展示出品者はいずれも教育学部生の植山俊博、山口早紀、勝木寛真、今井祥博、白上由季、梅原望、藤田知美、梶原友里奈の各氏である。展示に向けて彼らから心温まる紹介文をいただいたので以下に転載する。

本来この空間は埋蔵文化財の研究資料を博物館や科学館のような視点で展示、公開している場ですが、あえて美術作品を展示することにより普段の展示とは違った視点を提供する企画です。

近年の美術展では、美術作品をギャラリーや美術館の中ではなく、あえて博物館や科学館の中に展示するものも増えてきています。その場所固有の考古学や科学に関する文脈と美術作品がもつ意味との結合がどのような科学変化をもたらすのか、ご覧いただけたら幸いです。

埋蔵文化財に特化した当館がこのような企画展示を行うことに対しての賛否は多々あろうが、この一文をもって学生教育に対し当館が提供しうる役割の多様性について異論はないものと思う。

筆者は美術に関しては門外漢であり、共催とは名ばかりで展示の一切については学生諸氏にまかせたままであった。唯一「美術展らしい」ポスターの作成に挑んだことをおぼろげながら記憶している。また開催期間中は発掘調査に従事していたため、見学者の様子も実見していない。しかし個人的な感想を述べれば、日々の発掘調査終了後、すでに閉館し、いつもよりモノが少ない展示室の中で、何を考えるでもなく居並ぶ作品をただただ眺めていた自分（※展示室ですので作業服は脱いでいます）を思い返すと、その姿こそが歴史資料展にはない美術展の素晴らしさを物語っているのではないかと考えている。

大学が休暇期間となる2月にもかかわらず、会期中74名もの方々に展示を見ていただけたのは望外の喜びであった。この年度以降、当館においては学内連携展示が経常的な事業となるが、初回の成功に負うところが大きい。文末になるが、連携展示の開催に多大なる支援をいただいた本学教育学部中野良寿准教授に記して感謝の意を表したい。

写真 265　展示ポスター

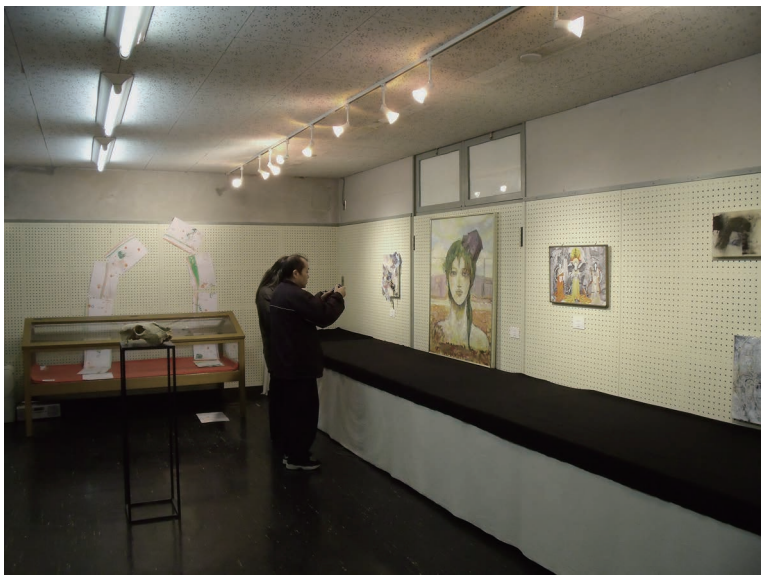


写真 266　展示の模様

地域連携展示 山口考古学フォーラム第1回巡回展示『やまぐち復元～古墳時代の食卓～』を開催

平成20年11月1日から11月28日までの期間、地域の考古学研究団体「山口考古学フォーラム」の巡回展示に共催参加した。

『やまぐち復元～古墳時代の食卓～』は、山口考古学フォーラムが平成19年から平成20年にかけておこなった研究成果を市民向けに展示として表現したもので、当館を皮切りに県内5施設（当館、山口市小郡文化資料館、光市文化センター、ながと歴史民俗資料室、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）を巡回する企画であった。山口県初の考古資料巡回展と位置づけられ、展示の準備期間、巡回期間を通し共催館として当館も積極的に参加した。

展示内容としては、

1．古墳時代（西暦400年～600年）の食器と調理器の変化

2．古墳時代の人々は何を食べていたのか

3．調理方法の変化による居住空間の変化

などについて実物の考古資料や模型、解説パネルを用いて解説したものであったが、当館独自のミニコーナーを設け、古墳時代以降、7世紀から8世紀にかけての山口大学構内遺跡出土土器を展示した。

また、オープン日は本学大学祭である姫山祭にあたるため、イベントとして総合図書館2階グループ学習室にて記念講演『古墳時代の山口市』を館員の藤野好博が行い、展示室での資料解説を横山が行った。その他、同じく共催館である土井ヶ浜遺跡・人類学から提供を受けた『卑弥呼も食べた 古代の赤米 100g』をオープニングプレゼントとした効果もあってか、オープン初日だけで100名を超える入館者に恵まれた。

実物資料とともに各種模型を組み合わせた資料展示に対し、見学者の反応は極めて良好であり、展示物ばかりでなく無料配布された展示パンフレットも大人子供問わず好評であった。

地域の考古学研究団体との連携展示も当館として初の試みであったが、山口考古学フォーラム諸氏のみならず、その後の巡回先である様々な館と館員の方々とも交流を果たせ、当館としても有意義な取り組みであったと考える。また多人数で構築された展示と接触したことで得られた多々の展示技術を、今後の展示活動に生かして行く所存である。

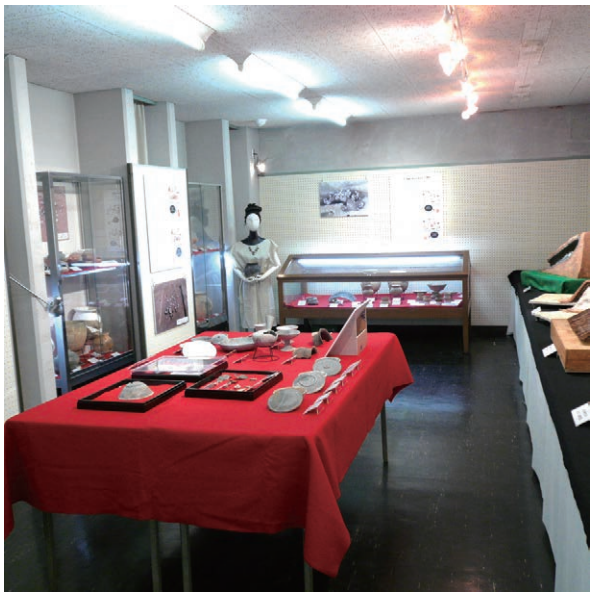


写真 267　展示の模様①

写真 268　展示の模様②

大学情報機構2008 in 七夕 Fes.にて資料展示『KANGA～吉田キャンパスに眠る官衙～』を開催

平成20年7月5日土曜日に開催された山口大学七夕祭（山口大学学生寮祭）に当館が所属する大学情報機構もイベント参加することになり、総合図書館は図書館内にて『図書館ツアー』『オリジナルしおりを作ろう！』『思い出の日の新聞を読んでみよう！』を、メディア基盤センターはメディア基盤センター棟1階にて公開生放送『Live On Radio in TANABATA Fes'』を、そして当館は総合図書館2階一般閲覧室を借用し企画展示『KANGA～吉田キャンパスに眠る官衙～』を開催した。

埋蔵文化財資料館は以前より七夕祭当日に臨時開館していたが、当館が祭会場の範囲外に位置するため、残念ながら例年学生および学外者の入館は少数であった。平成20年度七夕祭は資料館の展示替え期間に当たったこともあり、初めて総合図書館内で企画展示を開催することとなった。

展示では、吉田キャンパス出土の墨書須恵器、木簡、円面硯、ものさし、銙帯、製塩土器など古代官衙と関連する資料とともに、奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師器、緑釉陶器、黒色土器などを展示した。また昭和42年（1967）、山口大学吉田地区統合移転時に撮影された山口大学吉田遺跡調査団の発掘調査記録フィルムの上映も行った。その他、図書館での展示ということを意識し、山口県内の官衙関連遺跡の発掘調査報告書や概説書の閲覧コーナーも設置した。35㎡という当館展示室の狭小スペースに悩まされる日常の鬱憤を晴らすかのごとく充実した内容の展示を構成することができたと記憶している。

当日は晴天に恵まれた反面、図書館への入館者が少なく、メディア基盤センター主催のラジオ放送にも出演させていただき展示広報を行ったものの、見学者は疎らであった。

大学情報機構では、平成17年度より姫山祭（山口大学吉田キャンパス大学祭）にイベント参加しており、平成19年度にはその活動を医学祭（山口大学小串キャンパス大学祭）、常盤祭（山口大学常盤キャンパス大学祭）にまで拡大させた。平成20年度は、その取り組みを七夕祭にまで広げてみたが、問題点として事前広報の不十分さ、そして各祭の主体となる学生との連携不足が浮き彫りとなった。今後事業を継続する上で、まず「誰のために」「何のために」実施するのかを明確にした上で、着実な準備のもとに開催する必要があることを痛感した次第である。

写真 269　展示の模様①

写真 270　展示の模様②

大学情報機構2008 in 医学 Fes.にて資料展示『太古の技術革新～やよいどき登場～』を開催

昨年度に引き続き、平成20年11月８日土曜日に医学祭（山口大学小串キャンパス大学祭）にて大学情報機構主催のイベントを開催した。

会場は医学祭メインステージ裏手に位置する霜仁会記念会館1階ロビーとなり、大学情報機構3施設はそれぞれの特徴を発揮すべく、図書館はパネル及び図書展示『ふるさと文学者の横顔～山口市、宇部市にゆかりのある人たち～』を、メディア基盤センターは『お祭広場ライブ中継』を、そして当館は資料展示『太古の技術革新～やよいどき登場～』を開催した。

当館では、田畑直彦館員の指導の下、公開授業の一環として平成16年度より継続的に弥生土器の焼成方法と推定される「土器の覆い焼き」実験に取り組んでいる。その成果報告は既刊の山口大学埋蔵文化財資料館年報に詳しいが、この度の資料展示では、限られたスペースながらも弥生土器実物資料と実見により焼成した資料との比較展示を行うことで実験成果を公開し、焼成方法の視覚的表現として覆い焼き模型とともに焼成実験のビデオ上映した。さらに「弥生土器覆い焼き説」の論拠の一端を担っている東アジアに見られる土器焼成民俗事例の解説パネル展示も行った。

医学部内での考古学展示に若干場違いな感があったことも事実であるが、昨年度の参加経験により医学祭が「医学部生の研究・日常の問題意識の公開の場」であることを強く感じたため、当館としても研究・業務内容を直接的に公開する手法を採用した。

当日は生憎の曇天で小雨が降り続き、会場も導線的に人目に付きにくい場所であったが、70名の方々に見学いただいた。多くは本学学生と近隣市民の方々であり、展示物に対して様々な質問を受けた。わずか半日ばかりのイベントであったが、医学祭に参加した実感を得るとともに、充実した時間を過ごすことができた。機会を与えていただいた医学部生、医学部教職員の方々に深くお礼申し上げたい。

写真 271　展示の模様①

写真 272　展示の模様②

大学情報機構2008 in 常盤 Fes.にて企画展示『わたしの仕事展』を開催

医学祭と同様昨年度に引き続き、平成20年11月16日日曜日に常盤祭（山口大学常盤キャンパス大学祭）にて大学情報機構主催のイベントを開催した。

会場も昨年同様常盤キャンパス講義棟D棟と決定され、図書館はパネル及び図書展示『ふるさと文学者の横顔～山口市、宇部市にゆかりのある人たち～』を、メディア基盤センターは『ビデオで学ぶネット社会を生き抜く力』の上映を、そして当館は当年度開催した第25回企画展『ロマン発見～考古学者の鍬～』と第26回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』を再構築し、『私の仕事展』という名称で企画展示を行った。

昨年度までの経験により、本学大学祭は3会場（吉田・小串・常盤）ともにそれぞれの特色があると印象受けていた。中でも常盤祭はイベント色が強く感じられたため、今回の展示では「いかに見学者の興味を引くか」に重点を置き、展示を構成した。

展示では「遺跡とは何か」「埋蔵文化財調査の方法」など、熟読しなくては理解できない解説パネルを極力省略化し、現地調査に用いる記録用のフィルムカメラや測量機器、遺物の実測道具、報告書編集用のPC機器など各種道具類を充実させ、体験コーナーを増やすことにした。

大学情報機構のイベント会場が常盤祭メイン会場への通り道となっていることもあり、開催時間（12時～18時）中、約160名もの方々に展示見学いただいた。各展示物ともそれぞれ興味を集めていたが、中でも測量機器オートレベルは老若男女問わず大人気であり、スタッフを持つマネキンを相手に疑似測量を楽しむ姿が見られた。「日頃工事現場で目にする器械を実際に体験できて嬉しい」との声が多数聞かれ、「発掘調査なんですけれども…」と複雑な思いを抱いたことが思い出される。これも工学部ならではの現象と前向きに受け止めたい。

七夕祭、医学祭、常盤祭を通して、あらためてイベント会場での埋蔵文化財展示の難しさを実感した。「実物から私たちの遠い祖先の生活を学び、考える」という考古資料展示の本道が実施しがたい環境下で、それでも考古学・埋蔵文化財に目を向けていただけるような展示の工夫が必要と考える。次年度以降、ワークショップ開催の可否も含めて検討課題となった。

写真 273　展示の模様①

写真 274　展示の模様②

第８回～第９回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

平成17年度より吉田キャンパス総合図書館内にて展示ケース1台を借用し、大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催している。平成20年度も、図書館1階第2閲覧室にて2回の特別展を開催した。

第８回大学情報機構埋蔵文化財特別展『あしもとの遺跡シリーズ５　中近世の吉田遺跡』

「あしもとの遺跡シリーズ」では、第1回から4回まで「弥生時代の吉田遺跡」「古墳時代の吉田遺跡」「古代の吉田遺跡」「白石遺跡（山口大学教育学部附属山口中学校・小学校・幼稚園敷地）」を紹介してきた。シリーズ第5回は「中近世の吉田遺跡」をテーマとし、平成20年4月１日から7月４日までの期間で開催することとなった。

中近世の吉田キャンパス敷地に関して、近世は文書や絵図では現在の大学本部棟および農学部附属農場棟周辺に農村が形成される他は全域が農地であるとされ、発掘調査成果からもほぼ確実視されている一方で、中世の様相は未だ不明確な状況にある。わずかに本部2号館敷地で溝で区画された屋敷跡が、メディア基盤センター棟敷地とキャンパス南方の附属農場飼料園で中世期に成立した可能性がある集落跡が確認されているが、他の地では遺物包含層等から若干の中世土器が出土しているに過ぎない。今回の資料展示では以上の遺跡の現状を紹介したが、図らずも平成20年度後半期の発掘調査により、吉田遺跡において中世集落2ヶ所が発見されるに至った（本書所収）。今回の展示をもって「あしもとの遺跡シリーズ吉田遺跡」は終了予定であったが、今後新知見を交えた展示の必要性が生じたことは嬉しい誤算であった。

第９回大学情報機構埋蔵文化財特別展『あしもとの遺跡シリーズ６　山口大学医学部構内遺跡』

「あしもとの遺跡シリーズ」第6回は、本学小串キャンパスが所在する山口大学医学部構内遺跡をテーマとした。山口大学医学部構内遺跡は、明確な遺構は確認されていないが、包含層中から縄文時代後～晩期の土器をはじめ弥生～古墳時代の土器・石器、中～近世の土器や土製品、珍しい資料としては磁器製将棋駒など豊富な遺物が出土することで知られている。吉田キャンパスで勉学に励む学生には馴染みの少ない場所ではあるが、こうした資料展示を開催することで多地域に及ぶ本学キャンパス間の交流が深まれば幸いである。

写真 275　第8回大学情報機構埋蔵文化財特別展

写真 276　第9回大学情報機構埋蔵文化財特別展